「夢」の終わりを回避する方法

――佐藤春夫「美しき町」論――

構　大樹

はじめに

「夢」からの目覚めは、ときにひどい喪失感をもたらす。その喪失感から逃れるため、「夢」の終わりを拒もうとするとき、どのような方法が採られるのであろうか。

佐藤春夫「美しき町」(『美しき町』所収、天佑社、一九二〇)(1)では、語り手「私」によって、副題でも示される「画家E氏が私に語った話」が、「愚作」「未定稿」とされながらも披露される。テクストにおいて「私」が聞いたE氏の「話」は、次のようなものである。

> 明治の末年頃、当時は駆け出しの画家として「ひどく貧乏してゐた」E氏の前に、中学時代にアメリカへ渡った旧友川崎（テオドル・ブレンタノ）から手紙が届く。川崎と再会したE氏は、「或る不思議な、さうして最も愉快な企て」への協力を要請された。全財産をもって東京市中に「一つの美しい街」を建設しようとする川崎の「企て」に「有頂天になった」E氏は、川崎からの要請を快諾する。こうして動きだした「企て」は、さらに建築技師T老人を雇い入れることで、大正三年の夏の終わりには、土地の購入、設計の目処が立った。ところが、このときになって川崎は、初めから「企て」を実現させるほどの

金銭を持っていなかったことを打ち明け、大慌てで日本を去ってしまう。取り残される形となったE氏とT老人であったが、二人の交流はその後も続き、今まさに「正しく「美しき町」の一軒であるE氏の家庭」が、現実のものとなろうとしている。

従来、「美しき町」の研究においては、川崎の「企て」をユートピア建設譚と捉えることで、その由来探しに関心が傾斜してきた。川崎が愛読していたウィリアム・モリス『ユートピアだより』(テクスト内では「何処にもない処からの便り」)との比較はもちろんのこと、エドガー・アラン・ポー『アルンハイムの地所』からの影響も指摘されている(2)。また西村伊作の芸術生活村構想や、武者小路実篤の「美しき村」計画との同時代性も考察されている(3)。

しかし「美しき町」は、ユートピア建設譚に収束するばかりのテクストではない。というのも、ひとたび「画家E氏が私に語った話」として括られた部分の外枠に着目すると、「筆者」を自称する「私」に関する問題が浮上してくる。

海老原由香が述べるとおり、本来のE氏の「話」は、「画家E氏が真の芸術家へと成長していく謂わば「修業時代」の物語」と解される(4)。だが、その「話」は、「私」が語るのを「ひどくつまらなくなつて来た」ために、テクストの大部分がE氏の川崎と過ごした三年間の物語が占める結果となった。つまり、川崎の「企て」を中心化するユートピア建設譚という捉え方は、「私」による語り直しから前景化した物語への着目から生じるのである。この点を重視するとき、なぜ「私」は「芸術上の同感」から書き始められたE氏の「話」を「愚作」「未定稿」として著したのか、という問いが生起する。

無論、「筆者」としての「私」に着目する研究がないわけではない。「私」を「E氏らの正当な理解者というよりも、自己の嗜好をあらわにしE氏から離反する」人物と読む岡田浩行は、彼がE氏の「話」を語るのを「〈愚作〉として放棄」するのは、執筆を進めるなかで、E氏に「現実的な社会性と芸術性」の観点から過去の自分を自己批判する目的があることに気づいたため、と指摘している(5)。この指摘では、芸術家として成熟した現在のE氏に対する、未熟な「私」の無理解という解釈が前提となっている。だが、テクストにおいて「私」は、「何かのかげんであとをつゞけて見たいやうな気持ちにでもなつたら」、あるいは「ちよつと一口には言へない」と、「愚作」「未定稿」の理由となる、「T老人の話」と呼ばれる川崎の出奔以後の後日談を断片的に記すことについて、何らかの制約が働いていることを仄めかしている。岡田論は、テクスト末尾で示される「私」の、不自然なたどたどしさを説明し尽くすには不十分と言わざるを得ない。

よどみなく記述される川崎の「企て」に対して、たどたどしく記述される後日談は、テクストにおいて異質なものとして際立っている。また「私」の執筆に「二十前後の世間知らずの二少年と、六十五になつて未だ夢想することの出来る老人との話」を語るという方向性があるとしても、子ども向け読み物への変換に際して稲垣足穂が削除したように(6)、「つまらなくなつて来た」や「愚作」といった言辞で、E氏とT老人の念願叶った「美しい街」の実現という結末に、水を差す必要はないはずだ。

「美しき町」は、「私」が語るプロローグとエピローグの間に、「画家E氏が私に語つた話」が挟みこまれた入れ子構造のテクストである。この構造が採られることで、「美しき町」には、E氏の「話」を受けて「私」が語り直した物語の下に、ユートピアの建設をめぐる物語と、E氏の成長物語が織り込まれている。それでは「私」は、どのような狙いのもとで語り直したのであろうか。これまで看過されてきた末尾のたどたどしさを意味づけると、テクストは新たな側面を見せる可能性がある。そこで本稿では、このテクストが「愚作」「未定稿」と呼ばれなければならなかったことに着目することで、新たな解釈の提示を目指してみたい。

一　終わりが迫る「夢」

検討にあたって、まずはE氏が「私」に「話」を聞かせた理由が、テクストでどのように示されているのかについて確認しておく。そもそもE氏は「私」に「話」を語ったとき、「企て」によってもたらされた「神経衰弱」にも似た「ドリイミイな気持ち」から脱した存在としてあるのだろうか。

E氏が川崎に協力した三年間は、「幸福」な「夢のなかの光景」として描かれている。川崎の「企て」とは、山中千春が詳述したように、「具体的な建設や実現」というより、「日常レベルでの「疑問」「あこがれ」による「傑作のメルヘン」のようなイメージの形成が先行」するものであった(7)。川崎が語った「何等の成心もなしに物事をよく考へ、よく感ずることの出来る尊い人間たち」の「柔らかな心のなかへ深く沁み入つて、終生わすれることの出来ない印象を与へ」ることができて、初めて「美しい」といえる

に、気の毒にも、君がたですらも何の疑念もなしに私をそれだけの資格のある富限者だと思ひ込んだではなかつたか。〔四〇六～四〇七頁〕

E氏における、金銭を背景とする川崎への信頼は、「街」の建設地を中州に定めた日の晩、E氏が身だしなみを整え、「立派な黒い洋服」に着替える場面に象徴的にあらわれている。テクストには「そんな服装でなければ出入出来ないといふホテルの不自由極まる食堂へ彼〔＝川崎〕と一緒に行く為」に着替えたとある。ところがホテルの「食堂」へ行くのは、このときばかりではない。川崎との別れの日、昼食をとった場所も同じ「食堂」であった。だが、このときは着替えることの「不自由」さが意識されていない。E氏は川崎の「企て」に協力するなかで、「富限者」が集う場所のルールに馴染んでいったのであろう。この日を境に、E氏は「富限者」川崎とも一体化していったと言える。それほど、川崎の持つ金銭に信頼感を覚えていたわけである。

ならば川崎の出奔はE氏にとって、金銭的な不安が出来するという点でも、「夢」からの離脱を引き起こす大きな要因となる。川崎との別れの直後、E氏は「我々の三年越しの計画があんな風に、一夜のうちに崩壊したとはどうも未だ信じられな」い、「私には「美しい町」のことばかりが思われた」という。テクストには、その状態がいつまで続いたのか明示されていない。加えて、T老人との交流の継続は、彼が「いつも老人相応のくどさで「美しい町」のことを言ひ出す」ことで、E氏における「街」への憧憬を活性化し続けたことも推測できる。

けれども、「企て」を追い求めるという「夢」が、金銭の支持なくしては立ち行かないことは、テクストにおいてはT老人の「幸福」が家族の理解と、長男からの援助によって維持されていたという真相の提示によって、逆説的に暗示されている。したがって「話」をするE氏の現在は、川崎がいた頃と違い、「幸福」な「夢のなかの光景」に参入するために不可欠な、何の制約もない没入が困難な状況にあると言ってよい。

そして何より、「夢」を支える「題目」＝「企て」は、E氏が可能な範囲で現実のものとなろうとしている。「題目」の達成は、それ以上「追ひまはす」ことの理由を縮減させるだろう。これらの点から、E氏の現在は、「夢」の終わりが目前に迫った状態と定位できる。

E氏は、「街」の建設地を探す経験が「無かつたならば私の「都市風景」といふエツチングの連作は胚胎しなかつたかも知れない」と現在の影響について述べ、当時の「今日こそ見出さう」という焦りを「今日の今捕へなければもう無いかも知れないのは、反つて様々の描かるべき風景の方であるのに」と批評さえしている。現在の彼は、ちょうど「幸福」な「夢のなかの光景」の最中にあった時期を、少し離れた場所から語るだけの冷静さを持ち合わせた――「夢」から目覚めが近い人物として描かれているのである。

二　E氏の目論見

このように現在のE氏の状態を定位すると、さらに彼が「私」に「話」をした目的が、どのように示されているのかが明瞭となる。見逃せないのは、E氏は「私」に向かって、川崎の言動を反復している点である。E氏における「私」への接近は、「指紋の作者に或はどうして魚の口から金が出たか？　といふ神聖な噺の作者に是非とも、聞かせたい話があるのだが……」と、「私」の創作に理解を示すところから始まった。川崎もまた、同様の手法をもってE氏に近づいていた。

「街」のイメージに「捕へ」られたE氏は、「企て」に対する疑問を抱くことなく、「一心」にその完成を追い求める。テクストでは、何の制約もなくひとつの「題目」をひたすら「追ひまはす」という「夢」にひたっていられたT老人が、「幸福」と評されている。川崎の「企て」に、「一心」に協力した一人であるところのE氏も、まさしく「夢」のなかにいた「幸福」な人物であったと位置づけられる。

ただし、E氏が「企て」に没入できたのは、彼が「文学者や美術家などにも何等かの方法でその道の修道院があったらばよかろうに」と、「企て」と部分的に重なり合う、美に奉仕するための排他的な共同体の出現を待ち望んでいたためだけに起因しない。もちろん、川崎と「夢見る人のパッション」を共有できたためだけでもない。次に引用する、川崎の言い訳めいた口上を踏まえると、彼の持つ金銭を信用したためでもあったと考えられる。

私の気の毒に思ふのは君がた二人だ。それ〔＝「美しい街」〕の設計の記録を私の作品のなかに織り込まうと思つて、それに要するさま〴〵な能力と知識とが私に不足してゐることに気がついて、その助力を君がたに乞ひたいと思つた時

彼は二年前にも東京へ来たことがあると言ひながら、彼自身の背後を指ざして、「君、あれは仲々いいところがある」と私の画のことを言つた。さうして彼は彼自身でも少しは画を学んだことがあると言つたが、彼が私の画に就いて述べたところから推して見て、なる程それは全然のアマチユアが知つたかぶりをするのではなさそうに思へた。〔中略〕さういふ風に我々が芸術上の話をしてゐるうちに、彼は不意に語気を改めて、彼が将に実現しようとしてゐるといふ「或る不思議な、さうして最も愉快な企て」（と彼自身が言つた）を語り初めた。〔三八九～三九〇頁〕

川崎は、E氏の作品を褒めることで、自分とE氏との間に、芸術観の重なる部分があることを演出した。そうすることで、これから語る「企て」への関心を高め、協力を引き出そうとしたと言える。E氏の誘いにも、この演出がなされていたことは、「私」が誘い文句を受けて、ただちに彼に「互に互の作品を通じて同意し合ふことの出来る或るものを持つてゐる」と判断し、例外的に話を聞こうと関心を抱いたことから明白である。

E氏は、川崎の言動を反復している。この点を敷衍すると、彼が「私」に「話」を語った目的には、川崎のように「企て」を「小説」化することがあったと考えられるようになる。E氏は、「どうかして一生に一度自分の気に入つたやうな家を一つは建てゝ見た」かったT老人に触発され、自分に可能な限りにおいての「正しく「美しき町」のうちの一軒」を実現させつつあった。これは、芸術家として「有名」となったE氏の、成長の証でもある。

しかし、E氏が達成したのは、あくまで「「美しき町」の一軒」なのであって、「街」ではない。E氏に「街」を建設するだけの財力は、もちろんないだろう。E氏が「一軒」の家の群体としての「街」のイメージに魅せられていたことは、川崎と別れたのち、自然と彼の書くデッサンの「片隅には小さな家が並んで居た」ことから窺える。つまり、「正しく「美しき町」のうちの一軒」の実現はE氏にとって、「題目」の完全な達成には当たらないのだ。ここにおいて、かつて川崎が味わったような、どうしようもない「失望」と喪失感を、E氏も味わったであろうことは容易に想像される。

そこでE氏は「私」を選び、「企て」に関する「話」を「小説」化し、その読者が「企て」の新たな担い手となる可能性を設けることで、「夢」の終わりを回避

しようとしたのではなかったか。川崎が「企て」の「小説」化を通じて、「美しい街」を「人々の心のなかにだけは確実に在り得させ」、あわよくば「熱心な読者のうちに、好事の富豪があつて私の書物によつて動かされて、彼自ら立つてそれを実現させる」ために、すなわち時間的・空間的により広い範囲の読者に「企て」をひらくことで、それがいずれ再活性される機会の保証を目論んだ「小説」を書こうとしたように、である。

E氏が「企て」の時間的・空間的な持続を図り、その上で新たな担い手の出現を願っていたことは、彼が「私」の作品のうち、「指紋」と「どうして魚の口から金が出たか？ といふ神聖な噺」（正確には「どうして魚の口から一枚の金が出たか!? といふ神聖な噺」）をあえて取り上げ、「私」への関心の根拠としたことからも見出せる。

「指紋」（『病める薔薇』所収、天佑社、一九一八）は、ロンドン帰りのR・Nの狂気に感染する「私」が描かれている。この作品は、「狂人の妄想」が科学的な正しさを帯びたあまりに、「私」ばかりか読者にも、R・Nは「狂人ではなかつた」との思いを生じさせる(8)。一方、「どうして魚の口から一枚の金が出たか!? といふ神聖な噺」（『新潮』、一九一九・四）では、『マタイによる福音書』第十七章二十四節をもとに、イエスの予言がいかにして実現したのかについて語られる。イエスの「初めて鈎にかかつた魚の口を啓いて見よ、そこに一枚の金が這入つて居る筈だから」という予言は、実のところ自分が好きな「美しい言葉」を言ったに過ぎなかった。「魚」から「金」を入手する手段は問われていなかったのだ。しかし、それを受けたペテロは、イエスの予言を信頼し、機転を利かせて予言を現実のものとした。この「むかしむかし」で始まる作品が、読者に向かって説かんとしているのは、「美しい言葉」は受け手の心持ちしだいで「ほんとうに行う」ことができる、というものであろう(9)。

E氏が取り上げた二つの作品にはいずれも、不思議な言葉をめぐる物語を作者が語り直すことで、その言葉が現実化するまでの合理的なプロセスが立ち現れている。それゆえに読者は、不思議な言葉が単なる虚妄でなかったとの読後感に、少なからず浸ることになる。おそらく、E氏が手に取った「私の著書」＝『病める薔薇』から、作者のデビュー作「西班牙犬の家」や表題作「病める薔薇 或は「田園の憂鬱」」を挙げなかったのは、彼が惹かれたのが、「作者」の語り直しというスタイルであったからに違いない。

周知のとおり、「西班牙犬の家」ならびに「病める薔薇」は、そうしたスタイルで書かれたものではない。

このように、テクストにおけるE氏が「私」に「話」を語った理由とは、「指紋」や「どうして魚の口から一枚の金が出たか!?」といふ神聖な嘶」のように、自分の「話」が語り直された「小説」を通じて、「企て」を「題目」とする「夢」の魅力を、読者に提起してもらうことであったと考えられる。

三　「愚作」「未定稿」という素振り

では、E氏の「話」を聞いた「私」は、それをどのように「小説」化したのか。テクストは「私はこの拙い未定稿一篇を私の友情のしるしにE氏と同夫人とに捧げようと思ふ」で結ばれている。また「私」は、E氏の家庭に子犬を贈ることを約束している。E氏との交流の継続が保たれているということは、冒頭で示された「私」の好感が、「話」を聞き終えた後も変わらなかったことを意味する。岡田浩行は、テクストが「実際的で実効的な都市計画の計画図・計画書という面をもっている」と指摘している(10)。これは卓越した見解である。「私」はE氏の願いに沿って、読者に「企て」への協力を促す補助線を引いていたのだ。このことから、テクストの方向性が、基本的にはE氏の求めに応ずるものであったことが見えてくる。

だが、それにもかかわらず、「私」がテクストを「愚作」「未定稿」と呼ぶのはなぜなのか。

この問題を解く手がかりとして、後日談で示されたいくつかの疑惑が挙げられる。中沢弥によると、「後日談として作品の末尾に語られるE氏の結婚とその画室の完成は、「「美しき町」一編を清涼な夢として閉じる」ことに寄与しているという(11)。しかし、その後日談に続けて語られる事柄は、逆にテクストを「清涼な夢」で閉じることを阻む要素として機能するだろう。

で、テオドル・ブレンタノの川崎テイ〔十＋貞〕三はどうしたか？　彼は独探ではなかつた？「美しい町」の紙で出来た模型は何処かの砲台に似ては居なかつたか？……どうしてさういふ馬鹿げた併し一応は尤もでなきことも無い疑問が一度、どういふ人たちの間に起つたか？それからE氏の画室を立てる金がどこにあつたか？　何故にその画室の礎石にはTとEと川崎との名と年月日とを刻んだか？　正しく「美しき町」のうちの一軒であるE氏の家庭はどんな有様であるか？〔四一四頁〕

これらの疑惑は、大正三年八月に勃発した第一次世界大戦という「夢」の外部＝現実の事件を喚起させるものである。テクストにおいて「夢のなかの光景」としてある、E氏が川崎に協力した三年間は、現実の動きに関する描写が稀薄である。明治から大正への改元に関する話題が触れられない点は、その顕著な例と言える。こうした傾向は、E氏の没入の深さをあらわす。と同時に、現実と切断されたところに成り立つ「企て」の純粋さをもあらわしている。しかし「私」は、最後に疑惑を示唆することで、そうした「夢のなかの光景」に現実を招き入れたのである。これにより、「夢」が現実の側に引き戻されるのはもちろんのこと、「企て」の純粋さも留保されることは言うまでもない。

川崎の独探疑惑は、川崎がE氏やT老人を欺き、大慌てで日本を去ったことを考慮に入れるとき、完全には否定できないものとなる。川崎が去った大正三年夏の終わりは、ちょうど日本がドイツに宣戦布告し、独探の存在がにわかにクローズアップされた時期と符合する。たとえば同年九月二日付の『東京朝日新聞』には、川崎を思わせる出自の「独逸人」に関する記事が掲載されていた。

予て独探の嫌疑者として警視庁に注目しつゝありし独逸人某は其後行方を晦し居たるが去月二十九日逗子、鎌倉、横須賀を経て一昨夜横浜より東京へ入り込みたるより直に私服巡査が追行せしに芝区明舟町十九旅人兼下宿業鳥羽館田中さよ方へ投宿せしより尚該人の行動に就き厳重に監視しつゝあるが某は独逸人と日本人の間に生れたる混血児にて一見日本人の如く且日本語も巧みなり〔五面〕

また独探への関心は、「美しき町」とほぼ同時期の小説にもあらわれている。谷崎潤一郎「独探」(『金色の死』所収、日東堂、一九一六)には、「図らずも独探の嫌疑を受けて、都下の新聞紙上に普くその名を曝されて、日本を放逐されてしまつた人々の一人」のG氏と交流を持った「私」の物語が描かれた(12)。谷崎の「独探」は、「私」がG氏を「独探であつたらうと考へることは出来ない」と断言するところから始まる。しかし書き進められるなかで、最後には「私」は「G氏はやつぱり独探であつたかも知れな

い」との疑いから逃れられなくなる。これはG氏と「売国奴の嫌疑の下に捕縛された某と云ふ日本人」との関係が明らかになったことに由来する。この作品からは同時代的な、周囲の人間に「微塵も疑をおこさせ」ないで潜伏しているかもしれない「独探」に対する、ある種の脅威感を見出すことができよう。

もっとも、「独探」でより興味深いのは、「私」がG氏との「交際が最も親密な時」に関して「大概忘れてしまつたので、残念ながら十分に叙述することが出来ない」と語る点である。野崎歓は、この「思わせぶり」な語りがあることで、「読者の思いは、もはやG氏をめぐるスパイ疑惑の真偽以上に、そのG氏と深く交わった小説家自身の立場の危うさにむかわざるをえない」と述べている。つまり、「私」が「言葉を濁す」ことで、作品には彼が「ほとんど「売国奴」的裏切り」をなした可能性が浮上するというのである(13)。

この野崎の指摘は、「美しき町」にも援用できる。先に引用した、「ちよつと一口には言へない」として断片的に語られた疑惑に関する記述や、「私」による「若しまた何かのかげんであとをつゞけて見たいやうな気持ちにでもなつたら」という続編の示唆は、まさに「思わせぶり」な語りと捉えられる。すると、テクストにおいて「私」は、独探としての川崎に協力したE氏を、可能性として提示していることになるだろう。

テクストを同時代言説と交差させると、川崎は独探の捜索が強化されたことを機敏に察知し、いち早く行方を眩ませたのではなかったか、という疑惑から逃れがたくなる。またE氏についても、「ひどく貧乏してゐた」にもかかわらず、五年の間で「正しく「美しき町」のうちの一軒」を実現できた金銭の出所が怪しいものとして立ち現れる。その「一軒」には、「画室の礎石にはTとEと川崎との三人の名と年月日」が刻まれているという。実現のために用いられた金銭は、独探であった川崎からの謝礼によって賄われたのではなかったか。こうした疑惑はさらに、語るのを躊躇し「愚作」「拙い未定稿」としてあわただしくテクストを閉じようとする「私」の態度によって増幅される。あからさまにたどたどしい「私」の素振りは、はっきりとは言えない何かがあったことを仄めかしているように読めるためである。

テクスト末尾に配された疑惑は、E氏の達成に濃い影を落とす。他国からの金銭の流入は、「美しい街」の理念のひとつに掲げられた、「町の独立或は孤立」に抵触する。あるいは、「「美しい町」が本当に美しく楽しい町になるかどうかは、唯その町に住んだ人たち」にかかっている、との理念にも抵触するだろう。疑惑が付されたE氏の「正しく「美しき町」のうちの一軒」は、「街」の理念にそぐわない「一軒」という意味にずれ込んでしまうのである。

ならば、テクストにおける疑惑の配置は、さらに次のことを告げているのではないか。実現するかに見えた「企て」は、未だ真の意味で実現されていない。純粋な「街」を完成させる「企て」を追い求めるという「夢」はまだ終わっていないのだ、と。

ここで再び着目されるのは、先に指摘したE氏における川崎の行動の反復である。実のところ、反復という行為は、E氏に見られるだけではない。川崎においても、反復は重要な行為である。川崎は、自分に遺された遺産が「空想」の実現に足りないと知った際のやり切れなさを、「大きな翼で飛揚して居た私の重たい大仕掛な空想が真逆に墜落した時に、その下敷きになつた私の幻の町はめちやめちやに壊滅した」と表現した。この「幻の町」が「下敷き」になって「めちやめちやに壊滅」するという詩的な表現は、川崎が日本を去る前に、彼が作っていた精巧な「紙細工の市街」を「草の大きなカバン」の下敷きにして押し潰すという実際の行為で反復される。また川崎は、「唯私の持つことの出来る金が五万弗しかないと決つた時の私の失望を想像して貰ひたい。さうして、それはE君とTさん（老建築技師）とにはわけなく出来ることであらう――今の君がたの失望と驚きとこそは丁度私のあの時のものと別のものでは無いに違いなからうから」とあるように、真の「企て」に対する赦しを、かつて自分が味わったやり切れなさを、E氏とT老人にも味わわせることで得ようとしていた。

以上のことから、テクストには反復を重ねるという特徴があることに気づく。この特徴は、「私」の執筆した「小説」にも波及しているものと見なすことができよう。テクストにおいて、「小説」は二つある。「私」が入れ子構造をもってE氏の「話」を語り直した「小説」と、川崎が書こうとした「小説」である。そして後者の結末は、「主人公がそれらの〔「美しい街」に関する〕計画が完全に成立した時に、不幸にも死ぬこと」が予定されていた。テクストの特徴を鑑みても、「私」が配した末尾の疑惑とは、やはりタイトルによって焦点化される「美しい街」の現在を、「不幸にも」殺すためのものと考えられる。それによって、「私」は未完成の「街」を強調し、「夢」の終わりを回避しようとしたのであろう。

とはいえ、こうした処置はE氏の狙いどおりのものではないのかもしれない。彼が読んだ『病める薔薇』には、「美しき町」と同様に、未完成を強調することで、逆に題材の純粋さを表現しようとする「戦争の極く小さな挿話」という作品がある。この作品では、ある「一等卒の死」をめぐる小説を書こうとしても、兵士のあり方が作者の「想像以上」であるために「今だにそれが出来そうもない」とされる(14)。E氏がこの語り直しのスタイルが採られた作品を挙げなかったのは、自分の達成に一定の理解を示して欲しかったためと思われる。

おわりに

確かに、「美しき町」はユートピア建設譚の側面を持つ。川崎の「企て」が大部分を占めるテクストにおいて、このことは疑いようもない。E氏の狙いは、「話」の受け手に「企て」への協力を促すことにあった。魅力的なユートピア建設譚という側面は、「話」における勘所として位置づけられる。ただし、本来のE氏の「話」からするならば、「企て」と川崎の繋がりは、ことさら強調されるべきものでもなかったと言える。

E氏は、自分の「正しく「美しき町」の一軒」に、「私」が飼う「レオ」の子をもらい受ける予定である。隅田川に浮かぶ、中州に建設されようとした「街」を継承する「一軒」に、ライオンを意味する「レオ」の子はいかにも似つかわしい。ライオンはイタリアの水上都市ベネチアの守護聖人マルコのシンボルである。E氏の家が、「正しく「美しき町」の一軒」であることは、こうした細部でも示されているのだ。ところが問題は、川崎の本名テオドールも、ベネチアのかつての守護聖人の名と一致している点である。E氏があえて「レオ」の名を持つ犬の子を飼うというエピソードには、完成が目指される「街」に、川崎の影響を削ろうとしていることが暗示されているのだろう(15)。E氏は、自らの芸術家としての成長を証し立てる「一軒」の独立性をもって、E氏が発端となった「企て」が、今後新たに出発することを願っていたと考えられる。

しかし、「私」は「話」を語り直すことで、E氏の成果を、「企て」の部分的な達成に当たらないことを示した。テクストが「愚作」「未定稿」とされるのは、それを強調するためである。なぜなら、「企て」を「題目」に、その完成を追い求めるという「夢」は、E氏の達成で一区切りつけてしまうと、読者に対して「街」

にこだわる「企て」への協力を促す力が、相対的に低下する。それゆえに、「私」は「話」をそのまま語るのではなく、疑惑を差し込むことで、E氏の達成を正当な「企て」に叶わないものとしたのであろう。そして、この処置は、E氏の求めに応じつつ、「私」が独自に採用した、「夢」の終わりを回避する方法であったと考えられる。

「私」が採った方法は、E氏への裏切りと捉えられなくもない。しかし、E氏の狙いを引き受け、さらに「企て」の間口を広げたという点では、「私」は彼の理解者であり、協力者である。E氏の「話」は、まず「私」を「ドリイミイな気持ち」にしたと言ってよい。この意味において、「美しき町」は「友情のしるしにE氏と同婦人とい捧げ」られるに相応しいテクストなのである。

注

(1) 初出は「美しい町」(『改造』、全三回、一九一九・八～一二)。のち『美しき町』(天佑社、一九二〇)へ収録されるに際して、「美しき町」の表題に改められた。なお『幻燈』(新潮社、一九二一)には「夢を築く人々」、『美しい町』(細川書店、一九四七)には「美しい町」で、それぞれ収められている。本稿では『定本佐藤春夫全集』第三巻(臨川書店、一九九八)に則り、「美しき町」で統一する。本文の引用も同全集に拠った。

(2) 『ユートピアだより』との比較については、海老原由香「佐藤春夫「美しき町」論序説」(『駒沢女子大学研究紀要』、一九九八・一二)を参照。『アルンハイムの地所』からの影響は、磯田光一『鹿鳴館の系譜 近代日本文芸史誌』(文藝春秋、一九八三)で指摘されている。

(3) この点については櫻井啓一「「美しき町」の夢想家たち——「美しき町」考——」(「文藝と批評」、二〇〇〇・五)や南明日香「まちづくりのエクリチュール——佐藤春夫『美しき町』をめぐって」(『国文学研究』、二〇〇七・三)、河原和枝「大正のユートピア」(『文化社会学への招待——〈芸術〉から〈社会学〉へ』所収、世界思想社、二〇〇二)を参照。なお西村伊作の芸術生活村に関しては、加藤百合『大正の夢の設計家 西村伊作と文化学院』(朝日新聞社、一九九〇)が詳しい。

(4) 「佐藤春夫「美しき町」論——芸術家E氏の修業時代」(『東京女子大学紀要論集』、一九九九・九・一二)

（5）「〈地上〉にある〈美しい町〉――佐藤春夫の演技的自己露出――」（『文藝言語研究　文藝篇』、二〇〇六・三）

（6）稲垣足穂が手を加えた「美しき町」は、「美しい町」の表題で『蝗の大旅行』（改造社、一九二六）に収められている。

（7）「佐藤春夫『美しき町』論（一）――文学による文明批判――」（『近代文学資料と試論』、二〇〇五・一一）

（8）引用は『佐藤春夫全集』第三巻に拠った。

（9）注8と同じ。

（10）注5と同じ。

（11）「佐藤春夫のユートピア・ヴィジョン　「美しき町」のアルケオロジー」（『湘南国際女子短期大学紀要』、一九九七・二）

（12）引用は『谷崎潤一郎全集』第三巻（中央公論社、一九八一）に拠った。

（13）『谷崎潤一郎と異国の言語』（人文書院、二〇〇三）

（14）注8と同じ。

（15）川崎の名とベネチアの守護聖人の関連性については、本稿を検討する場において、大國真希氏からご教示いただいた。その場で様々ご助言くださった方々に、記して感謝申し上げます。なお、隅田川からのベネチアの想起は、「美しき町」とほぼ同時期に発表された柳川（芥川）龍之介「大川の水」（『心の花』、一九一四・四）にも見受けられる。

※引用に際して、適宜ルビ等を省略している。また引用文中の〔　〕内の文字は、論者による注記をあらわすために用いている。傍線も論者によるものである。